The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	正当化の帰属説を用いた命題的知識の分析
Author(s)	中山, 康雄
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2009, 35, p. 193-206
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10211
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

正当化の帰属説を用いた命題的知識の分析

中山　康雄

目　次

はじめに
１．正当化概念の相対化
２．ゲティア問題の解法
３．信念帰属者による知識規定と知識外在主義
４．正当化の社会的概念
５．構成主義的知識論の記述
６．結論

正当化の帰属説を用いた命題的知識の分析

中山　康雄

はじめに

「知識」という概念は、伝統的には、正当化された真なる信念として定義された。そしてこの知識の伝統的定義がゲティア反例という難問に直面することは、広く知られている。ゲティア反例は、正当化された真なる信念であっても知識とは認められないような事例のことであり、ゲティアによりはじめて指摘された（Gettier (1963)）。また、このゲティア問題を解くために、正当化の条件をさらに限定するという方法や新たな条件を付け加えるという方法が提案され続けてきた（Steup (2006)）。本稿で私は、正当化概念を知識帰属者に依存して相対化させるという従来とは異なる方法を用いることにより、ゲティア問題を解く方法を提案する。この方法を用いることにより、知識の伝統的定義を擁護しつつゲティア問題を解くことができる。そしてこの提案が、知識についての内在主義と外在主義の間の議論に新しい視点を提供することも明らかにされる。

１．正当化概念の相対化

知識は伝統的には、正当化された真なる信念（justified true belief, JTB）として把握されてきた。この見解を、「知識の JTB-分析（JTB analysis of knowledge）」と呼ぼう。この JTB-分析の図式は、次のような規定として表すことができる（Steup (2006)）。

(K) 知識の JTB-分析 [1)]
S は p ということを知っている　⇔
(K1) S は p と信じている　&
(K2) p は真である　&
(K3) S は、p と信じることに関して、正当化されている。

(K3)の条件は、Ｓの p という信念が単なる幸運により形成されたものではないことを保証するためのものである [2)]。この知識の JTB-分析に反する例としては、ゲティアの反例がよく知られている（Gettier (1963)）。そして、(K)に対する多くの修正案は、第四の新条件を付け加えることにより問題を解決しようとするものである。これに対し私は本

稿で、「正当化」の概念を知識帰属者に相対化することにより、知識の JTB-分析に複数の解釈が可能なことを指摘する。そしてこれに続き、この分析の特性を描写する。以下、このような分析を「正当化の帰属説に基づいた分析」、あるいは単に「帰属説に基づいた分析」と呼ぶことにする。

中山(2007)は、信念所持者が持つとされる信念内容を信念帰属者に依存させることを提案し、この方法により信念に関する諸パズルを解くことができることを指摘した（p. 121）。これに従えば、信念所持者を S、信念帰属者を B とするとき、(K1)の記述について次のように二つの解釈を得る。

(K1-S) S は $[p]_S$ と信じている。
(K1-B) S は $[p]_B$ と信じている。

ここで、(K1-S)は p という文で表される信念所持者 S にとっての信念内容を S が自己帰属する場合を表し、(K1-B) は p という文で表される信念帰属者 B にとっての信念内容を B が S に帰属する場合を表している。

これと同様に、正当化の概念も信念帰属者により相対化させることが考えられる。すると私たちは、正当化に関して、次の二つの解釈を得ることになる。

(K3-S) S は、$[p]_S$ と信じることに関して、＜正当化＞$_S$されている。
(K3-B) S は、$[p]_B$ と信じることに関して、＜正当化＞$_B$されている。

この記述法を用いると、信念所持者Ｓにとっての正当化である＜正当化＞$_S$と、信念帰属者Ｂにとっての正当化である＜正当化＞$_B$が区別できる。ここで＜正当化＞$_X$は、次の(1a)のように規定できる。ただし、信念内容の信念帰属者による相対化は、この命題的知識の議論の中では無視できることが多く、$[p]_S$ と $[p]_B$ が同一なものと扱ってもかまわないので、以下ではこれらを区別せず、単に p と表すことにする。

(1a) S は p と信じることに関して、＜正当化＞$_X$されている　⇔
　　S は＜信頼のおける認知プロセス＞$_X$に基づいて p という信念を形成した。

この(1a)の規定は、正当化理論における信頼性主義[3)]（Reliabilism）の正当性の規定を判断者により相対化することにより一般化したものである。ただし、＜正しい信念＞$_X$は、次の(1b)の定義が示しているように、「Ｘが正しいと思っている信念である」ことを表している。また、＜信頼のおける認知プロセス＞$_X$は、Ｘがその認知プロセスに信頼をおいていることを意味している。

(1b) S の認知プロセス C は、＜信頼のおける認知プロセス＞$_X$である　⇔　X は C に信頼をおいている。

(1c) p が＜正しい信念＞$_X$である　⇔　X は p と信じている。

(1d) ＜正しい信念＞$_X$に基づく＜正しい推論＞$_X$を用いての S の p という信念形成は、＜信頼のおける認知プロセス＞$_X$に基づく信念形成の一種である。

ここで特に重要なのは、「正しい信念」という概念が判断の主体により相対化されることである。というのも、正当化の違いが複数の人の間で現れるのは、これらの人たちの間で何が正しい信念であると判断されているかが異なることによる場合が多いからである。

そこで、伝統的知の規定も次のように二重化することが適当だろう。

(K-S) Ｓは p ということを＜知っている＞$_S$　⇔　(K1-S) & (K2) & (K3-S)

(K-B) Ｓは p ということを＜知っている＞$_B$　⇔　(K1-B) & (K2) & (K3-B)

(K-S)は、信念所持者であるＳ自身が「自分は p ということを知っている」と思うときの真理条件を表している。これに対し(K-B)は、知識帰属者がなすこれと同タイプの知識帰属に関する真理条件を表していることになる。知が問題になるのは、通常、(K-B)が問題になっている場合である。例えば私たちは日常生活の範囲では、(K-S)が成り立つが(K-B)が成り立たない場合には「Ｓは p ということを知っていると思っているが、実は知っていない」などと言い、知っていると思っていることと実際に知っているということを区別しようとする。そして、この事態はこの表記法を用いると、「Ｓは p ということを＜知っている＞$_S$が、＜知っている＞$_B$わけではない」というように表現することができる。

２．ゲティア問題の解法

すでに述べたように、知識の JTB-分析には、ゲティアの反例が解くべき難問として立ちはだかっている。しかし、第１節で導入された相対化された正当化概念を用いると、正当化された真なる信念としての知の規定に対するゲティアの反例は、信念が＜正当化＞$_S$されても必ずしも＜正当化＞$_B$されない事例として説明することができる。以下、このことを詳しく説明することにする。

ここでまず、古典的なゲティアの反例がどのようなものだったかを確かめておこう（Gettier (1963)）。それは、認識的幸運（epistemic luck）が成立しているような場面では知識の JTB-分析が不適切になるということを示す例として、用いられるものである。

[例１] スミスとジョーンズが同じ仕事の求人に応募している。スミスは、その会社の社長が「採用されるのはジョーンズだ」と言うのを聞いた。また、スミスは先ほど、ジョーンズと一緒にジョーンズのポケットに入っている硬貨を数えた。そこで、スミスは次のように考える。

(2a) 採用されるのはジョーンズであり、なおかつジョーンズのポケットには１０枚の硬貨が入っている。

そこで、スミスは(2a)を根拠に次の(2b)を信じるようになった。

(2b) 採用される男のポケットには、１０枚の硬貨が入っている。

しかし、スミスは気づいていないが、その会社に採用が決まっていたのは実はスミスであり、またスミスも自分のポケットにたまたま１０枚の硬貨を持っていた。

この例において、JTB-分析の三つの条件はすべて充たされているように思われる。例えばスミスは、（例１の記述にある通り、）(2b)を信じている（(K1)の条件）。次に、(2b)は（たまたまではあるが、）真である（(K2)の条件）。そして、(2a)から(2b)は論理的に帰結するので、スミスは(2b)を信じることに関して、正当化されている（(K3)の条件）。それにもかかわらず、スミスが(2b)を知っていると考えることは、私たちの知識の理解に反するように思われる。というのも、(2b) が真であるのは、スミスの信じていることからすると、偶然であるように思われるからである。そして、これが知識の JTB-分析に対する反例となるとゲティアは指摘したのである [4)]。

ここでスミスの(2b)に対する信念は、スミスの観点からは正当化されているが、この反例の考案者であるゲティアの観点からは正当化されていないということに注意しよう。というのも、スミスは(2a)を正しいと考えているが、語り手としてのゲティアや読者である私たちのほうは、採用されるのはスミスだと知っているので、(2a)は誤りだと思っており、(2a)を(2b)の根拠にとることはスミスの認知プロセスを信頼できないものにすると考えているからである。そこで、私の考えでは、(1a)-(1d)の規定を用いた次のような記述が可能になる。

(3) スミスの(2b)という信念は＜正当化＞$_{スミス}$されているが、＜正当化＞$_{ゲティア}$されてはいない。というのも、スミスが(2b)の信念の根拠とした(2a)は、＜正しい信念＞$_{スミス}$だが、＜正しい信念＞$_{ゲティア}$ではないからである。つまりスミスは、(2a)という＜誤った信念＞$_{ゲティア}$を根拠にして(2b)を信じているのである。そこで(K-S)と(K-B)に従って、スミスは(2b)を＜知っている＞$_{スミス}$が、スミスは(2b)を＜知っている＞$_{ゲティア}$わけではないということになる。すると、「スミスは(2b)と信じることに関して＜正当化＞$_{スミス}$されており、スミスは(2b)を＜知っている＞$_{スミス}$ことになるが、スミスは(2b)を＜知っている＞$_{ゲティア}$わけではない」というように、知識の JTB-分析と知識についての私たちの直観のどちらをも尊重する結果が得られることになる。

このように考えると、信念所持者に対する知識内在主義（K-Internalism）[5] は、その核の部分を守ることができる。ただし同時にそれは、知識概念の半面しか捉えていないという限定付きの擁護となる。

このような本稿の提案により得られる効果は、一見、ステアップが検討している次の第四番目の新条件を(K)に加えることがもたらす効果と同じように見える（Steup (2006)）。

(4) S の p という信念は、誤りから推論されたものではない。

しかし、(4)の規定では、誤りが誰から見ての誤りなのかが明示化されていず、実は、＜正しい信念＞$_{スミス}$が＜誤った信念＞$_{ゲティア}$でもありうるというような明示化が問題の解明には必要なのである。

JTB-分析に対する反例には、ゲティア反例とは別種のものも存在する。例えば、モーザーがあげている例では､催眠術にかかっている間の言明が使用される（Moser (1992)）。これは、(4)の条件が充たされても(K)の規定が命題的知識の定義として適切でないことを示す例として構成されている。

[例２] p が「ジョーンズはフォードを所有している」という命題を表し、r が「会社の誰かがフォードを所有している」という命題を表しているとしよう。ジョーンズから、彼がフォードを所有していることをスミスは聞き、スミスは、ジョーンズに信頼をおいているので、p を信じるようになる。そして、ジョーンズが催眠術にかかっている間に、ジョーンズが買った宝くじでフォードの自動車がたまたまあたったとする。このとき、スミスは、r という正当化された真なる信念を抱くが、彼は r と知っているわけではない。

この例の場合には、ジョーンズの発言をもとにしたスミスの推論が信頼のおける認知プロセスであったかどうかが、私の分析のポイントになる。このとき、ジョーンズに信頼をおいたスミスの推論は、＜信頼のおける認知プロセス＞$_{スミス}$となる。しかし、ジョーンズが催眠術にかかっていることを知っている語り手のモーザーや私たち読者にとっては、このスミスの推論は＜信頼のおける認知プロセス＞$_{モーザー}$ではなくなる。というのも、ジョーンズの発言の根拠は、彼の通常の信念に則したものではなく、催眠術により誘導されたものだからだ。これをまとめると、次のようになる。

スミスの r という信念は＜正当化＞$_{スミス}$されているし、スミスは r ということを＜知っている＞$_{スミス}$。しかし、スミスの r という信念は＜正当化＞$_{モーザー}$されておらず、スミスは r ということを＜知っている＞$_{モーザー}$わけではない。

このように、正当化の帰属説に従った JTB-分析は、モーザーの反例にも対処できる。つまり、信念所持者の観点からは JTB-分析の三条件(K-S)がすべて充たされていても、信念帰属者にとっては正当化条件(K-3B)が充たされていないので信念所持者は r を知っていないことになる。

３．信念帰属者による知識規定と知識外在主義

知識外在主義は、内的正当化は知識の必要条件ではないと主張する立場である。私の立場は(K-S)と(K-B)から帰結するが、それは次のように明確化することができる。

(5a) ＜正当化＞$_S$は、＜知識＞$_S$の必要条件である。
(5b) ＜正当化＞$_S$は、信念帰属者Ｂにとっての＜知識＞$_B$の必要条件ではない。これに対し、＜正当化＞$_B$は＜知識＞$_B$の必要条件となる。

この(5b)は、知識外在主義（K-Externalism）の主張を帰属説の記述に翻訳・明確化したものとなり、信念所持者Ｓによる正当化が信念帰属者Ｂにとっての知識の必要条件ではないことを示している。

このような帰属説による記述は、バンジョーによる千里眼の能力を持つ人物の例にも適用できる（BonJour (1985)）。

[例３] ノーマンは、千里眼の能力を持っているが、彼自身は自分のこの能力に信頼をおいていない。しかし実際には、ノーマンの千里眼能力は信頼のおけるものである[6]。ある時点 t において、ノーマンは自分の千里眼能力により、「この瞬間アメリカ大統領はニューヨークにいる」（p_N）という信念を形成する。

この例の場合、正当化内在主義（J-Internalism）によれば、ノーマンの千里眼能力は（彼自身にとり）正当化されていないので、ノーマンは t 時にアメリカ大統領がニューヨークにいることを知っていないことになる。一方、正当化信頼性主義（J-Reliabilism）によれば、ノーマンの千里眼能力は信頼がおけるものなので、ノーマンはこのことを知っていることになる。これらの違いは、帰属説では、どちらの立場が正しいかという問題としてではなく、むしろ記述における視点の違いとして把握される。ここで、「ＪＲ」はノーマンの千里眼能力に信頼をおく人物を指すとすると、この記述における視点の違いは次のように表現される。

(6a) ノーマンの p_N という信念は＜正当化＞$_{ノーマン}$されていない。だから、ノーマンは p_N ということを＜知っている＞$_{ノーマン}$わけではない。

(6b) ノーマンの p_N という信念は＜正当化＞$_{JR}$されている。だから、ノーマンは p_N ということを＜知っている＞$_{JR}$。

正当化の帰属説に従うと、この千里眼の例はゲティア反例とは別の現象パターンを示していることがわかる。信念帰属者をＢとするとき、ゲティア反例では、信念所持者Ｓの信念 p についてＳは＜知っている＞$_S$が、＜知っている＞$_B$わけではないことになる。これに対し、千里眼者の例では、Ｓの信念 p についてＳは＜知っている＞$_S$わけではないが、＜知っている＞$_B$ことになる。

第１節から第３節までの議論で示されたように、正当化の帰属説は、JTR-分析に対するさまざまな反例に適切に対処できることがわかる。

４．正当化の社会的概念

正当化の帰属説を用いて、「集団に関する正当化」という概念も明確化することができる。

(7a) 命題 p はG-正当化されている ⇔
p に対して専門家集団であると集団Ｇが認める集団 E が存在する　&
すべての E の構成員 X について、X の p という信念は＜正当化＞$_X$されている。

(7b) S の p という信念は、集団Ｇで正当化されている　⇔
S は p と信じている　&
S はＧの構成員である　&
S は、自分がＧの構成員であると信じている　&
p はG-正当化されている　&
S は、p がG-正当化されていると信じている。

(7c) S は集団Ｇにおいて p と知っている ⇔
S の p という信念は、Ｇで正当化されている　&
p は真である。

この「集団に関する正当化」の規定においては、認識的分業（division of epistemic labor）が成立している集団が前提にされている[7)]。(7c)の「集団における知識」の規定は、信念所持者自身の正当化能力を要求しないので、「知識外在主義的規定」と言える。そして、私たちが日常で持つ多くの知識は、このような集団における知識だと言えるだろう。

５．構成主義的知識論の記述

正当化の帰属説は、数学基礎論における実在論的知識概念と構成主義的知識概念の間の違いを特徴付けるためにも用いることができる。

実在論的知識概念と構成主義的知識概念の違いは、構成主義者が構成主義的証明しか正当化の手段として認めないところにある。ここで、実在論者をＲで表し、構成主義者をＣで表そう。すると両者の違いは、両者の正当化概念の違いとして表すことができる。より詳しく言うと、構成主義者は実在論者よりも狭い正当化概念を持っている。というのも、構成主義的証明は、実在論者もすべて正しい証明として認めるからである。

(8a) ある命題 p が＜正当化＞$_C$されているなら、p は必ず＜正当化＞$_R$されている。しかし、この逆は必ずしも成り立たない。

(8b) ある命題 p が＜知識＞$_C$ならば、p は必ず＜知識＞$_R$でもある。しかし、この逆は必ずしも成り立たない。

また構成主義は、真理を正当化可能性と同一視する立場として特徴付けることができよう。そこで、構成主義者にとっての真理の規定は次のように定義することができる。

(9) p は＜真＞$_C$である　⇔　p は＜正当化＞$_C$することができる。

また、「＜真＞$_C$であるものは、必ず、＜真＞$_R$ でもある」も成り立つが、その逆は必ずしも成り立たない。そして、私たちが日常で用いている真理概念は、実在論的な＜真＞$_R$ と一致する。

構成主義者の存在は、真理概念や正当化概念が複数ありうることを示唆している。そして、これを帰属説の立場から記述するなら、構成主義と実在主義という二つの立場の存在は、正当化概念が立場により相対化されるべきであることを示す具体例となっている。

６．結論

本稿で提案した正当化の帰属説が正しいなら、知識に関する内在主義と外在主義を調停することができる。これら二つの立場は、ある意味で、両立する。つまり、この二つの立場により表されているのは、同一の心的状態に関して二つの視点からなされる異なった種類の知識帰属に他ならない。そのひとつの知識帰属は、その心的状態の帰属がなされる主体自身からなされ、これが知識に関する内在主義に相当する。そして、もうひとつの知識帰属は、第三者によるものであり、これが知識に関する外在主義の一タイプに相当する。また、ゲティア問題やその変種もこれら二つの視点を区別することにより

解決できることが示された。さらにこのことにより、伝統的知識の分析である JTB-分析の有効性が一定程度擁護されることが明らかにされた[8)]。

注

1) ここで、「P⇔Q」は、P と Q が論理的に同値だということを意味しており、「P であるのは、Q のとき、かつ、そのときに限る」という表現の省略形だとする。

2) しかし、後に見るように、(K3)の条件は幸運による信念形成を誰の目から見ても問題がないように排除することを保証するものではない。

3) (1a) は、ステアップが「単純 J 信頼性主義（Simple J-Reliabilism）」と呼ぶ立場にたった正当性の規定を利用している（Steup (2006)）。これに対し、単純K信頼性主義（Simple K-Reliabilism）は、正当性概念を用いずに信頼性概念を用いて直接に知識概念を定義する。この立場では、知識は次のように定義される： S が p と知っている ⇔ S の p という信念は信頼のおける認知プロセス（reliable cognitive process）である ＆ p は真。K信頼性主義を表明している哲学者には、ドレツキなどがいる（Dretske (1985, 1989)）。

4) ゲティア反例には、例 1 とは異なる例もあるが、どれも基本的には認識的幸運を用いたものであり、その基本構造は変わらない。

5) ステアップによれば、正当化内在主義（J-Internalism）は「正当化は直接的に認識可能である」と主張する立場であり、知識内在主義（K-Internalism）は「内的正当化（internal justification）は知識の必要条件のひとつである」と主張する立場である（Steup (2006)）。また、正当化外在主義（J-Externalism）は正当化内在主義を否定する立場であり、知識外在主義（K-Externalism）は知識内在主義を否定する立場となる。

6) バンジョーはここで想定されている種の千里眼能力について次のように説明している（BonJour and Sosa (2003)）。ただし、ここでは、ノーマンの代わりにアマンダが千里眼能力の持ち主とされている。「おそらくこれまでのところ科学的探究の目を逃れている特殊な因果的プロセスのために、その種の事柄についての信念が、時として、特定の条件下で、アマンダに自然発生的にかつ強制的に出現する。そしてそのように生じた信念のほとんどは、あるいはおそらく常にまちがいなく真であるとする。」（邦訳 p.34）

7) パトナムは、言語的分業（division of linguistic labor）の考えを導入した（Putnam (1975), 中山 (2007) 第八章）。またキッチャー は、「認知的分業（division of cognitive labor）」という概念を導入している（Kitcher (1993) p. 344f, 伊勢田 (2004) p. 11f）。そして中山 (2004) は、「知の分業」という概念を導入している（第八章）。ここでの「認識的分業」という概念は、パトナムの「言語的分業」という概念の一般化であり、中山 (2004, 2007) の考えに従ったものである。

8) 本稿は、日本科学哲学会第 40 回大会において 2007 年 11 月 10 日になされた口頭発表「正当化の帰属説を用いた命題的知識の分析」の発表原稿に訂正・加筆をしたものである。

文献集

BonJour, L. (1985), *The Structure of Empirical Knowledge*, Harvard University Press.

BonJour, L. and Sosa, E. (2003), *Epistemic Justification: Internalism vs. Externalism, Foundations vs. Virtues*, Blackwell.（上枝美典（訳）(2006),『認識的正当化：内在主義 対外在主義』産業図書）

Dretske, F. (1985), Precis of Knowledge and the Flow of Information, in: H. Kornblith (ed.) *Naturalizing Epistemology*, MIT Press.

Dretske, F. (1989), The Need of Know, in: M. Clay and K. Lehrer (eds.) (1989), *Knowledge and Skepticism*, Westview Press.

Gettier, E. (1963), Is Justified True Belief Knowledge?, *Analysis* 23, pp. 121-123.

伊勢田哲治 (2004),『認識論を社会化する』名古屋大学出版会

Kitcher, P. (1993), *The Advancement of Science: Science without Legend, Objectivity without Illusions*, Oxford University Press.

Moser, P. K. (1992), Gettier Problem, in: J. Dancy and E. Sosa (eds.) (1992), *A Companion to Epistemology*, Blackwell, pp. 157-159.

中山康雄 (2004),『共同性の現代哲学ー心から社会へ』勁草書房

中山康雄 (2007),『言葉と心ー全体論からの挑戦』勁草書房

Putnam, H. (1975), Putnam, H. (1975), The Meaning of ‘Meaning’ in: H. Putnam (1975), *Mind, Language and Reality: Philosophical Papers*, vol. 2, Cambridge University Press, pp. 215-271.

Steup, M. (2006), The Analysis of Knowledge, revised on Jan 16 2006, *Stanford Encyclopedia of Philosophy*, http://plato.stanford.edu/entries/knowledge-analysis/

An Analysis of Propositional Knowledge Using a Theory of Justification Attribution

Yasuo NAKAYAMA

Traditionally, knowledge is defined as *justified true belief*. This approach is called the *JTB-analysis of knowledge*. Since Gettier (1963) pointed out certain problems with JTB-analysis, researchers have offered several proposals to solve *Gettier problems*. These proposals can be classified in two groups. The first group narrows the *justification condition*, while the second group proposes adding a new condition to the original three conditions. However, both types of proposals have been attacked with new types of counterexamples. In this paper, I propose a new general method for solving Gettier problems: relativize the concept of justification by the attributer of knowledge, where the bearer of knowledge is also interpreted as the *self-attributer*.

According to my method, the JTB-analysis of knowledge (K) can be interpreted in two ways, either as (K-*S*) or (K-*B*), where (K-*S*) expresses the self-attribution of knowledge and (K-*B*) expresses *B*'s attribution of knowledge to *S*.

(K) *S* knows that *p* *if and only if*
(*S* believes that *p*, it is true that *p*, and *S* is justified in believing that *p*).
(K-*S*) *S* <knows>$_S$ that *p* *if and only if*
(*S* believes that *p*, it is true that *p*, and *S* is <justified>$_S$ in believing that *p*).
(K-*B*) *S* <knows>$_B$ that *p* *if and only if*
(*S* believes that *p*, it is true that *p*, and *S* is <justified>$_B$ in believing that *p*).

In this light, Gettier's counterexamples can be analyzed as cases where the *belief-bearer* and *belief-attributer* have different judgments about the justification of *S*'s belief that *p*. In other words, the following statement holds in all of Gettier's counterexamples: *S* <knows>$_S$ that *p*, but *S* does not <know>$_B$ that *p*, because *S* is not <justified>$_B$ in believing that *p*, although *S* is <justified>$_S$ in believing that *p*. Therefore, there is nothing wrong with the JTB-analysis of knowledge. It only appeared to have problems, because philosophers have not considered the possibility that there are two types of interpretations in JTB-analysis, namely (K-*S*) and (K-*B*).

The last part of this paper demonstrates that the above proposal can be used to deal with not only Gettier problems but also other types of counterexamples such as those proposed by Moser (1992) and BanJour (1985). To sum up, the discussion in this paper shows that when

characterizing knowledge, it is extremely important to take the attributer's viewpoint into consideration. This paper also provides a new viewpoint for examining controversies concerning the internalism and externalism of knowledge.